

「はつと」スバスハ王子」ニュース

はつと

第8号

1995. 4. 1 発行

定価30円

編集責任者
発行
連絡先
振替口座番号

「はつと」編集部 堀部 正
八王子市長府町七一九一六九一四〇七
多田 道夫
TEL 0426-151555
(0426-151555)

女性部の指導の下全員が一所懸命

秋川 潤太郎

今回の「はつと」は、料理教室でした。僕は、ちゃんとした料理を作るのは苦手なので、ちよつと不安でしたが、グループのキャップの女性が上手で、指導されてやりました。作ったのは、ハンバーグでしたが、みんなから「うまい」と、評判が良かったです。他のグループが作った料理もなかなかおいしかったです。男も女も一緒になって、料理を作るのは、意義があると思います。昔、「私作る人、僕食べる人」というコマーシャルが差別だと批判されたのを、覚えていますが、



家事や料理は女がやるものだという既製の価値観が女性差別の大きな問題として批判・指摘されている中で、男たちも一人前に料理を作るようになっていかなければいけないと思います。

そのような意味でも、今回の料理教室は、また一つ良い経験になりました。僕は現在、東京のある地区で一人で暮らしている「病者」で、ハ



いつもだとおしゃべりだけの高倉さん

王子はちよつと遠いのですが、昔からの友人で代表のT君に誘われて昨年の末から参加しています。あまり堅くなく、ゆつたりとした雰囲気、で、「精神障害者」の交流を作つていくのは良いことだと思ひます。

僕は今、障害年金を受けて、生活していますが、いろいろな症状に悩まされて、しんどい毎日を過ごしています。時々現実の差別の重さのため、人生に絶望的になることもありまふ。そんなとき、T君や患者の友人に励まされて、希望を取り戻したりします。



僕の症状の一つに、「白昼夢」というのがあつて、自分の作つた夢想の世界に入つてしまつて、現実を喪失してしまうことがしばしばありますが、そのようなとき、「ほつと」のような集まりの所へ出ていくと、現実の世界に戻れます。その様な意味でも、「ほつ

とスペース八王子」のような場を大切にしたいと思ひます。

場所が遠いので、日常的には関われませんが、月一回の例会には、なるべく参加できるようにしたいと思ひます。

おばたりあん大活躍の料理教室

田宮 登美子

今回は女性部が担当ということで、おばたりあんが大活躍。いままで利用していた調理室は、予約済みでした。が、fさんが探してくれて大助かり。初めて参加の若い人もとても朗らかそうにいましたし、よい勉強になったのではないのでしょうか。おばたりあんは無駄が嫌いで、材料の量も参加人数分ピッタしだし、本当のおばたりあんは家庭ではもつと上手にしています。

が、スッタモンダで仕上げました。食べ始めたたとたん、「最後の晚餐」だとふざけて、tがキリストにされてしまいました。私はイスカリオテのユダと格好つけました。食べることは楽しいですね。一人暮らしの人は多くの人と食べることが、どんなに楽しいことでしょう。もつと時々料理教室をやりたいですね。

現実との触れ合いのワンステップ

—お料理教室に参加して—

堀川 望

ある医師が、「病」者の現実への呼び戻しをどうしたら良いかと問うていました。全国「精神病」者集団



食事が出来たら楽しい歓談

のOさんは「『病』者は四次元の世界にいます」と言います。精神病院へ入れられ、退院しても、ひっそりと生保などで生活している「病」者達。「健

常」者との触れ合いも少ない私たち。そんな私たち「病」者自らが、(殊に、今回は女性部企画)お料理を作り合い、みんなで車座になって食す。ある人は「とつても充実していました」と言ってくれました。本当に美味しかったのです。

私は、可能な限り「病」者は、現実と触れ合うと良いと思っています。(とても難しいのですが)それによって孤立は癒され、「病」すら癒されることがあるのです。(もちろん、手ひどい精神的外傷になっ



まうのが恐いのですが)そんなとっかかりに「ほつとスペース八王子」を利用したらどうでしょう。利用とは言葉が悪いのですが。私は元連れ合いに「おまえには経験則がない」と言われていました。病院にいることが多かった私は、確かに現実の経験が少ないのです。働いた職もうちで一人です。仕事が多かったためもあるのでしょう。積極的に経験すること。そのためのワンステップ「ほつとスペース八王子」。ソフトな中間施設化しないように気をつけながら。

なぜ社会復帰運動でなく、解放運動なのか(二)

退院して十六年——

堀部 正

退院して十六年、ほとんどいまは入院していた「富士病院」に訪れることはなくなっていました。退院直後は、何年かは通院ということ



女性部のご指導よろしきを得て、それぞれが持ち場で

もあつて、訪れていたのですが。

まだ「健常者」ベースの生活に戻っていたわけではなかったのですが、日常生活を繰り返していく間に、入院生活の苦しかった想いや入院仲間のこと、次第に、記憶から薄れていくことの恐ろしさをかみしめていました。その当時、4畳半一間のアパート暮らしで、建築現場を点々とする清掃の仕事で月十二万円。満足しようと思えばそれなりにできる状態でした。

しかし、自分が「精神障害者」であるという現実から逃れることができなかった。隠しておけば、それで何ら問題なく生きていけたでしょう。そして

しんどい時にはうれしい

—女性部家庭訪問— 多岐田 裕子

春近いきよう私の家に田宮さんと堀川さんが遊びに来て下さった。私は焼そばを作りました。二人とも「おいしい」と言って食べてくれました。4、5時間三人で、楽しい一時を過ごしました。私は一人暮らしなので、「ほっと」に入会して、本当に良かったとつくづく思いました。

入院生活上の様々な想い、入院仲間のことなど次第に記憶から消え始めていたので、それを良いことにして、そのままひっそりと一人あんな小さなアパートで暮らしていれば良かったはずだったのです。

(五頁につづく)

しかし、それは何かしっくりこなかったのです。退院したばかりの自分分は入院生活上もそうでしたが、もう七〇年代の昔のように学生運動などはできないとあきらめていましたし、何事に対しても自信が全くない状態でした。それでも、何か自分だけがこうやって退院生活をしているということが、奇妙な感覚に囚われていたのです。退院できないで苦しんでいる仲間や退院と入院のくり返して苦しんでいる仲間といっしょに生活していたその当時の気持ちと、どうもしっくりとかなかったのです。この想いはたとえ結婚して、愛する子供に囲まれ、つれあいがそばにいたとしても、必ず私に襲いかかってきたでしょう。(つづく)

私の幻聴奮戦記

平田一郎

私は現在四七才になる男性です。二〇才の頃、家の近所のささいな喧嘩か

らいいゆる幻聴が始まりました。

常に自分何物かによつて監視されているといふものではない。当



初参加者を交え、自己紹介

時は埼玉の一軒屋

に住んでいて、自分の部屋があつたのですが、その部屋が周囲の家に囲まれていたために、のぞかれているという気持ちに常に支配されていた。夜も監視されていると思つて、眠ることもできず、頭の中では「アイツは泣いている、狂っているんだ」「女みたいな奴だ」「いつもメソメソしていやがる」というような幻聴が聞こえてきました。

実際にも私は、苦しさと悔しさの入り交じった気持ちで、泣いていました。ある時には、電車の中で、尾行されていると思つて、急に電車を飛び降り、自分の目的地とは反対の方向に、一旦行つて、

それからドアが締る直前に降りて、駆け足で反対ホームの電車に乗込むということもありました。もちろん、その間中也目は涙目になってしまっていて、本当につらかったのです。



出来上がった料理を前にしてお預け

またある時には、先ほども言っているように、監視されているという気持ちになっていたのですが、とうとう我慢できなくなって、包丁を持って隣のアパートに怒鳴り込んで行ったこともありました。幸いにも、鍵が締っていたので、大事には至らなかったのですが、街を歩く時にも、尾行、監視されているという気持ちから、足が地につかず、呼吸も乱れてハア、ハアするのです。通り過ぎる車のナンバープレートのナンバーを調べようとしたり、必死でした。

精神科医や社会の人は、幻聴は自分の意識の反映だとか自分の考えていることが幻聴という形を取って表れると言いますが、私には未だにそうは思えません。この十年は私は精神障害者だ、本当に監視されていてもかまわな

い、と聞き直つて、楽になりましたが、幻聴とは現聴なのではないかと本当に信じています。どうか苦しむ「病者」を理解してください。

「ほっとスペース八王子」3月活動日誌

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1日 「ほっと」7号発行、発送作業 | 17日 「ほっとスペース八王子」発起人会 |
| 3日 勉強会 | 18日 「ほっとスペース八王子」料理教室 |
| 7日 女性部泳ごう会 | 21日 女性部家庭訪問 |
| 9日 勉強会 | 23日 「ほっとスペース八王子」発起人会 |
| 14日 女性部泳ごう会 | 25日 女性部家庭訪問 |
| 14日 勉強会 | 27日 厚生省交渉 |
| 16日 水泳会 | 28日 女性部泳ごう会 |